

# 「黄金のエルサレム」

—ナオミ・シエメルの代表作に登場するユダヤ古典解説—

小久保 乾 門

“Jerusalem of Gold”

A commentary on phrases from Jewish traditional literature  
quoted in Naomi Shemer’s masterpiece.

KOKUBO Solomon

## Abstract

The music of Naomi Shemer (1930-2004), one of the Israel’s most prolific songwriters, has a deep relationship with the history of modern Israel: her songs have been called ‘the diary of Israel’. She started her career as a composer and a songwriter in the period when Israel was granted independence. Through her music she played the role of a “spokesman” for Israeli people in every moment of the history of modern Israel, expressing the joy of the founding of the new nation, the pain of wars with neighboring countries, and prayers for peace. She wrote of the beauty of her homeland, ‘the land of Israel’, and her songs themselves became a home for the hearts of many Israeli people. Besides traditional songs, children growing up in the new Jewish society did not have any of their own songs, but Shemer satisfied this lack.

This work briefly shows the life of Naomi Shemer and the character of her literature and music. It offers a commentary on phrases from Jewish traditional literature quoted in her masterpiece, *Jerusalem of Gold*, and searches for the reason why the piece acquired the title “the second national hymn of Israel”.

## Key words

Israel, Jerusalem, Hebrew literature, Jewish people  
イスラエル, エルサレム, ヘブライ文学, ユダヤ人

---

平成17年2月28日 原稿受理  
大阪産業大学 教養部非常勤講師

## 1. はじめに — ナオミ・シェメル音楽について

2004年6月26日、イスラエル国独立後約半世紀にわたって「ヘブライ歌謡」という分野で音楽活動を続け、多大な業績を残したナオミ・シェメル(1930-2004)が74年の生涯を閉じた。彼女の音楽活動は作詞・作曲から始まり、演奏活動、他の詩人が書いた詩への作曲、外国の詩のヘブライ語翻訳とその詩への作曲など多岐にわたり、半世紀以上に亘ってイスラエルのポピュラー音楽界をリードし続けた。彼女の手になる作品は1000曲以上に及ぶが、その作品の種類は「お祭りの歌」「『イスラエルの地』<sup>1)</sup>を歌った歌」「軍隊の歌」「追悼歌」「祈りの歌」「子供の歌」など多種多様である。また時代背景や曲のテーマによって、曲想も行進曲風の勇ましいものから子供向けの童謡までさまざまである。本稿の目的は、彼女の数多くの作品の中でも、彼女の国民的音楽家としての地位を不動のものにした代表作品「黄金のエルサレム」("הַבַּיִת שֶׁל זָהָב" [yərūšalayim šel zāhāb]) に使われるユダヤ古典の分析であるが、その本題に入る前に、彼女の音楽の特徴について短く述べておきたい。

ナオミ・シェメルはそのほとんどの創作活動を、歌手やフェスティバル、ラジオやテレビ番組などから寄せられる依頼に基づいて行っていた。「良い音楽とは、外部からの依頼と内部の創作意欲とが出会った時に生まれるものである」<sup>2)</sup> というのが、彼女の音楽作家としてのスタンスであった。当然依頼者の要請に応じて、また時代によってもその曲想はさまざまに変化する。しかし、彼女の手によって生まれる多種多様な音楽には、そのほとんどに明らかかな「ナオミ・シェメルの刻印」が刻まれる。その特徴は、時には子供のような素直さで歌われる「美しいイスラエルの地」であり、時には聖書の預言者から近代の開拓者たちまでにわたる、イスラエルの先人たちが抱いていた「イスラエルの理想」であり、そして時には戦争やテロといった重苦しいテーマの音楽にさえ刻印される「未来への希望」である。理想や希望などというテーマは、まかり間違えばカビの生えた理想主義の押し付けにもなりかねない。しかしシェメルにおけるこれらの刻印は、子供から大人まで、誰にでも親しめる平易な言葉遣いと美しい旋律にのせられて語られるためか、多くの人々に素直に受け入れられる<sup>3)</sup>。

---

1) 「イスラエルの地 (エレッツ・イスラエル)」は旧約聖書に由来する呼称で、地理的には現在「パレスチナ」と呼ばれる地域と一致する。厳密な境界線を持った呼称ではないが、ユダヤ人にとっては「神に約束された地」という特別な意味が含まれる。

2) Walla (web 情報サイト) 編集部, "נעמי שמר-הביוגרפיה" (ナオミ・シェメルの伝記)

URL : <http://e.walla.co.il/?w=/1000/562299&tb=/i/2869300> 2004年6月27日

3) 例えば音楽評論家のハノフ・ロン教授は「私は彼女の曲を歌っているとき、その音楽があまりに自然に心に響いてくるので、その音楽を彼女ではなく、自分が作ったかのように錯覚してしまうのである」と論評している。ノ

シエメルの音楽が持つこのような特徴がどこから生み出されてきたものなのか、ナオミ・シエメルの生い立ちと、彼女自身が語った言葉の中にそれを探ることができる。

ナオミ・シエメルの両親は、1920年代にリトアニアから第三次アリヤー<sup>4)</sup>でイスラエルの地に帰還したシオニストであり、「クブツァット・キネレット」というガリラヤ湖南西部に位置する集団農場の創立に関わった。ナオミは1930年に長女として誕生する。少女時代に彼女の心に焼きついたガリラヤ湖畔の風景の美しさは、「イスラエルの地」を描写し続けるインスピレーションの泉となっている。ナオミ・シエメルが描くイスラエルの風景は、多くのイスラエル人が共有している懐かしい「近代イスラエルの原風景」であり、彼女の曲が持つノスタルジックな力は、彼女の音楽が多くの人を魅了する最大の要因の一つである。その代表的な詩の一つと言える "חורשת האקליפטוס" [hōršat hā'eqalīptūs] (ユーカリの林) の歌詞を紹介する。これは彼女が生まれ育った「クブツァット・キネレット」の創立五十周年を記念して作られたミュージカルのための曲である。

1

母がこの地に来た時、美しく若かった

その時父は、丘の上に彼女のために家を建てた

多くの春が過ぎ去り、半世紀が過ぎた

その間に、巻き毛は白髪になった

〈くりかえし〉

しかしヨルダン川のほとりは

まるで何も起きなかったかのよう

同じ静寂、同じ風景

ユーカリの林 橋と船

そして水面にはあかざの香り

(1963年 "חורשת האקליפטוס" [hōršat hā'eqalīptūs], 1番とくりかえし部分)

---

↘ URL : <http://glz.msn.co.il/glz/culture/7B96FD22FBC94F59849E6A7C3F0719E3.htm>  
2004年7月2日 イスラエル国防軍放送電子版

4) 「アリヤー」とはヘブライ語で「シオンへの帰還」を意味する。「第三次アリヤー」は、第一次世界大戦後の1919年から始まったイスラエル帰還運動で、1923年ごろまで続く。特にロシアや東ヨーロッパから、社会主義国家建設の情熱に燃えた「ヘハルーツ（開拓者）運動」に属する若者が多数イスラエルに帰還、国土の開発、労働組合や自衛組織の創立など、イスラエル国家建設に向けた基盤づくりに従事した。

この歌では、彼女の母親や故郷の風景という個人的な思いを主題として歌っているのであるが、多くのイスラエル人はこの歌に自分の母、自分の故郷を投影して懐かしさに浸る。この人々に懐かしさを抱かせる「美しいイスラエルの地」が、ナオミ・シェメルが彼女の音楽に刻む刻印の最大のものの一つであろう。

また「イスラエルの理想と希望」という刻印については、両親の影響に言及しなくてはならない。母親リベカの徹底した理想主義者ぶりについてナオミは多くの逸話を語っている。母親は高い教育を受けた才女で、幾つもの言語を使いこなし、ヘブライ語でも文学者はだしの文章を書いていた。しかし彼女が通っていた「文化」という学校の指導者たちが「学者はたくさんいる。今必要なのは農民である」と言った言葉をきっかけにペンを捨て、農業の研究と実践に没頭した。入植の理想に最も必要なことを実践するということが、当時の開拓者たちの最高の理念であったのである。2002年に行われたマアリヴ紙の記者とのインタビュー記事<sup>5)</sup>で、ナオミ自身が、なぜ母親がナオミに音楽を学ばせたかについて語っている。「それは個人的な理由からではありませんでした。音楽や歌といった心に余裕を持たせるものがなくては、入植という大事業も成熟した社会としての意味がないという考えから、私にその任務を負わせようとしたのです。私にその任務以外の、例えば実生活を生きる能力などを身につけさせようという考えは彼女にはなく、そのため私は今に至るまで料理などは苦手です。」ナオミ・シェメルの音楽のおおもとを辿れば、入植の理想の実現の一端だったのである。

母親による音楽教育の厳しさは徹底していた。彼女は三歳の時からピアノのレッスンを受けるのであるが、毎朝五時には起こされ音楽室で連日のように訓練を受けた。こうしてすでに六歳の時にはキブツのお祭りや安息日などで歌の伴奏をするようになっていたのである。ナオミ自身は母親のこのような極端な理想主義的な考えには「生涯反発を覚え続けた」と語っているのであるが、しかしこの母親の教育なくして「音楽家ナオミ・シェメル」がなかったこと、またこの両親の理想主義的な生き方が、彼女の心に生涯変わることもない大きな肯定的影響を刻んだことも、彼女自身が同じインタビューで告白している。次の一文は、イスラエルがどのような否定的な状況にあってもシェメルがあくまで希望を歌うことに対して、記者が「あなたはどこからいつも希望を見出しているのですか」と問うた質問に答えたものである。

「私は生まれつきそういう環境にあったのです。私は第三次アリエーの開拓者の両親に生まれました。彼らにとってディアスポラの地からイスラエルに帰還することは、解放への角笛

---

5) Kuben,Roni "על כל אלה" (2004) להפירד בשרי (maariv 紙特別版) インタビューは2002年だが、記事となったのはナオミ・シェメルの没後。

の音<sup>6)</sup>でした。父親は多くの非合法移民<sup>7)</sup>の船をイスラエルに運ぶために働いていましたし、母親も農業をナハラルの農業学校で学び、ガリラヤ湖周辺で最高の苗の移植専門家にまでなりました。そして何も無かったところに、バナナ、グレープフルーツなど畑を次々と広げていったのです。まるで創世記の中にいるようでした。このような、革命的なことを行っていた人々の子供として生まれたなら、常に希望を持つような人間に育つということは自然なことです。」ナオミの音楽に表れる希望や理想の源泉のひとつは、この開拓時代に生きた両親とキブツの姿に求めることができるのである。

もう一つ忘れてはならない源泉は、聖書をはじめとするユダヤの古典である。ヘブライ語を誰よりも愛した彼女は、ヘブライ語で書かれた聖典や文学を愛読し、常に創作のインスピレーションをそこに求めた。彼女が詩の中で最も大切なことを語ろうとする時、多くの場合古典の言葉を直接、又は少しアレンジを加えて引用するという方法が採られる。ナオミ・シエメル自身はいわゆる宗教家ではないし、その両親の時代から宗教的伝統とは切り離された環境で育っている。しかし彼女のユダヤの古典への造詣の深さとその引用の見事さは宗教家さえ驚かせる。彼女が聖書の言葉にどのように向き合ったか、その良い例の一つが最後に発表された彼女の曲、"בְּדָמַיִךְ הָיִי" [bəḏāmayiḵ ḥāyī] (血まみれのお前に『生きよ』)によく現れている。この曲はもともとテロにより傷害を負った若い女性たちを励ますテレビ番組のために作られた曲であるが、この曲における聖書の引用方法は、彼女のスタイルの典型的なものであろう。

## 1

古の言葉が私に力を与える 古の声に私は癒しを見出す  
それらは私が生きることを助け 私が育つことを助ける  
より美しい世界を創造するために  
〈くりかえし〉  
私がお前の傍らを通して  
お前が自分の血の中でもがいているのを見たとき  
私は血まみれのお前に向かって『生きよ』と言った

---

6) 旧約聖書では50年ごとに、奴隷が解放されて自由になることができる「ヨベルの年」が設けられているが、そのときには「角笛を鳴らして自由の年を告げる」という記述にちなんだ表現。(参照レビ記25章)

7) パレスチナ地方のイギリス委任統治時代、ユダヤ人の移民は厳しく制限されていたが、ユダヤ人の地下組織は非合法のユダヤ移民を助けた。この移民を「非合法移民」と呼んだ。

血まみれのお前に向かって『生きよ』と

2

突然私の頭上に虹がかかり 七色の扇が広がる

生命の訪れと、希望の訪れ

そして平和と、静寂と、慈しみの訪れを伝える

(2002年 "בדמייך חיי" [bədəmayik ḥāyī])

この曲の1番には、彼女の聖書の言葉に対する気持ちが端的に述べられている。彼女にとって聖書は「生きる力」であり「癒し」であり、聖書を用いる目的は「より美しい世界の創造」である。この曲のくりかえし部分はエゼキエル書の引用であるが、そこで彼女はこの歌で最も表現したい思いを述べる。それを一言で言うなら「死んだように見えても、なお生きている希望」である。ここに刻まれる「未来への希望」の刻印の内容は、2番の歌詞と相まって宗教歌的でさえある。このようにナオミ・シェメル音楽において聖書の言葉は、最も訴えたい部分を表現するために決定的に重要な役割をしている。

以上に述べたようなナオミ・シェメルの「刻印」は「黄金のエルサレム」の歌詞を学ぶ上でも大切なポイントである。

## 2. ナオミ・シェメルの代表曲「黄金のエルサレム」解説

### 1) 歴史的背景

ナオミ・シェメルの最も有名な代表作は何かと問われて、1967年に作られた "ירושלים של זהב" [yərūšālayim šel zāhāb] (黄金のエルサレム) 以外の曲を挙げる人は少ないであろう。イスラエル国独立以来19年間分断されていた町、エルサレムがイスラエルに統合された第三次中東戦争の記憶と共にイスラエルの人々に不滅の印象を残し、現代に至るまで毎年行われる「最も好きなポピュラーソング」アンケートのトップを独占し続けている名曲である。また「イスラエル第二の国歌」とも呼ばれている。

「黄金のエルサレム」は、毎年独立記念日にエルサレムで開催されていた音楽祭の招待曲として、1967年当時のエルサレム市長、テディ・コレック氏の依頼で書かれた。ナオミ・シェメルはこの歌のための歌手として、当時まだ軍の歌謡団に属する無名の一女性兵士でしかなかったシューリー・ナタンを指名した。二人は以前に面識があるわけでもなく、たまたま彼女の声 flowed ラジオ番組を、シェメルが一度聴いただけだったのである。音楽祭における初演は大成功で、アンコールの時にはすでに聴衆はくりかえし部分を一緒になって歌って

いたという。

この曲が伝説の歌となる決定的な要因は、この曲が誕生した歴史的タイミングであろう。「黄金のエルサレム」が初演された音楽祭からわずか三週間後の6月5日、第三次中東戦争(六日戦争)が勃発した。ヨルダン軍との交戦となったエルサレム戦線では、イスラエル軍が全エルサレムを制圧し、ユダヤ教の聖地「嘆きの壁」と「神殿の丘」を含む旧市街にイスラエルの主権をもたらしたのである。イスラエル国独立から数えると19年目という事になるが、ユダヤ人の歴史にとってみればこれは紀元70年にローマ軍によって神殿が破壊され、ユダヤ人がエルサレムから追放されてから、約二千年ぶりのエルサレムへの完全帰還ということになるのである。この「エルサレム回復」という出来事がユダヤ人にとって、イスラエル近代史のみならず、数千年に亘るユダヤ人の歴史の中でも特筆すべき大事件であったことと、「黄金のエルサレム」の歴史的な大ヒットとは切っても切れない深い関係がある。

しかし、どれほど歴史的タイミングが良かったとしても、エルサレムの曲ならどんな曲でもヒットしたわけではなかろう。やはりナオミ・シエメルが書く歌詞とメロディーの魅力がこの曲を伝説の名曲にしているのである。ここでは「黄金のエルサレム」の歌詞、特に古典の引用についての分析を試みたい。

「黄金のエルサレム」の歌詞には、聖書時代から中世に至るまで、ユダヤ人が持つエルサレムへの信仰と思慕の情とが生み出してきた数々の詩歌や物語がちりばめられている。また本稿「はじめに」の項で示した「ナオミ・シエメルの刻印」の全てが凝縮されている。よってこの曲の歌詞を分析し研究することは、ナオミ・シエメルの文学を知る良い足がかりとなるであろう。またナオミ・シエメルが多くの古典をどのように引用し、またどのようにそこにナオミのスパイスを加えているかを探究することにより、イスラエル人がこの曲を聴き、歌うときにどのような印象を受けているのかを多少とも再現する事が可能である。これらの分析により、なぜ「黄金のエルサレム」がその誕生後四十年近くもイスラエルで「最も好きなポピュラーソング」に選ばれ続けるのか、その理由の一端を垣間見られればと思う。

分析に入る前に、「黄金のエルサレム」の全ての歌詞を、日本語で書いておく。

## 黄金のエルサレム

### 1

山々の空気はワインのように透明で 松の香りが 鐘の音とともに  
たそがれの風に漂う 木と石がまどろむ時 彼女は夢に囚われる  
ただ一人たたずむ街 その心には 城壁がある。

(くりかえし)

黄金のエルサレム 赤銅と光の  
私は汝の全ての歌に 豎琴ではないか

2

なぜ貯水槽は枯れてしまったのか 市場の広場には誰もいない  
旧市街で 神殿の丘を見守る者はいない  
岩山の洞穴には 風が吼えたける  
誰もエリコの道を通して 塩の海に下りて行く者はない

3

しかし今日私は来て 汝を讃えよう そして汝に冠をかぶせよう  
汝の息子たちの誰よりも そして最後の詩人よりも私は小さい  
汝の名は 唇をこがす まるでセラフィムの接吻のように  
エルサレムよ もし私が汝を忘れるならばその全てが黄金の・・

4

わたしたちは貯水槽に帰ってきた 市場に そして広場に  
旧市街の神殿の丘で 角笛が鳴り響く  
岩山の洞穴には 数千の太陽が昇り  
わたしたちはもう一度塩の海に下っていこう エリコの道を通して

(1967年 "ירושלים של זהב" [yərûšālayim šel zāhāb])

## 2) 「黄金のエルサレム」という題について —ラビ・アキバと妻ラケルの物語—

まずは「黄金のエルサレム」という題名についてである。「黄金のエルサレム」は、バビロニア・タルムード<sup>8)</sup>やエルサレム・タルムード<sup>9)</sup>などのユダヤ教聖典に残されている「ラビ・アキバ」の物語に登場するエルサレムの城壁を刻んだ黄金の冠の名称である。

ラビ・アキバは一世紀後半から二世紀前半にかけてパレスチナ地方で活躍したラビで、ユダヤ教の歴史の中でも最も偉大なラビの一人として現在にいたるまで尊敬の対象になっている。タルムードに残された伝承によると、ラビ・アキバは四十歳になるまでは読み書きもで

---

8) 紀元500年ごろ、バビロニアで編纂されたユダヤ教の聖典。

9) 紀元400年ごろ、パレスチナ地方で編纂されたユダヤ教の聖典。

きない羊飼いであったが、その後、妻ラケルの献身的な援助によって偉大なラビとなった。彼が活躍した時代は、ローマによるエルサレムの神殿破壊（紀元70年）からバル・コクバの反乱<sup>10)</sup>（紀元132年～135年）にまたがる、ユダヤ民族にとっては最も悲劇的な時代であり、ラビ・アキバ自身もバル・コクバの反乱直後に起こった一連のユダヤ人迫害の中でローマによって処刑される。エルサレムに関するラビ・アキバの伝承は数多く残されており、ナオミ・シエメルへの文学的、思想的影響も少なくないが、ここでは「黄金のエルサレム」という装身具が直接登場する部分のみを紹介する。

以下、バビロニア・タルムードからの引用である。

ラビ・アキバはカルバ・サブアの羊飼いであった。カルバ・サブアの娘ラケルは、彼が謙虚ですばらしい人であることを見出した。彼女は彼に言った。「もし私があなたと婚約をしたら、あなたは聖書学校に行きますか？」彼は言った。「はい。」そこで彼らは密かに婚約をした。そのことを知ったカルバ・サブアは、彼女を家から勘当し、彼の豊かな富のわずかをも与えることはなかった。ラケルはアキバと結婚をした。冬、彼らは藁の上で寝た。アキバは彼女に言った「もし私にそれが与えられるならば、貴女に『黄金のエルサレム』（アラム語原文は יְרוּשָׁלַיִם דְּדָהָבָא [yərūsālayim dedahābā] = יְרוּשָׁלַיִם שֶׁל זָהָב [yərūsālayim šel zāhāb])」を贈ることができるのだが。

(バビロニア・タルムード「誓願」50-1)

ここにまず、極貧の中にあったラビ・アキバが妻ラケルに贈りたいプレゼントとして「黄金のエルサレム」という装身具が登場する。その後ラビ・アキバは聖書と律法を12年かけて学び、やがて多くの弟子を連れて彼は帰郷する。しかし貧乏のどん底にあった妻ラケルが「さらに12年学んで欲しい」と言う言葉を聞き、また学びに戻るのである。

12年が過ぎ、彼は二万四千人の弟子を連れて故郷に帰ってきた。全ての人々が彼を出迎えた。彼の妻もまた話を聞き、彼を迎えに出た。しかし近所の女性たちは言った。「まず服を借りて、身を覆いなさい。」彼女は言った「義人は家畜の求めさえ知っている。」(箴言12-10) 彼女はラビ・アキバの許に行き、地にひれ伏し、彼の足に接吻をする。彼の弟子たちは彼女を押しつけた。ラビ・アキバは言った。「彼女を放しなさい。私が持つ

---

10) ローマがユダヤ人に割礼を禁じたことをきっかけとして起こったユダヤ人の蜂起。ラビ・アキバがその精神的指導者の一人であり、彼の弟子たちの多くもこの戦争に参加して死んだと考えられている。

ものも、あなたたちが持つものも、みな彼女のものなのだ。」

(バビロニア・タルムード「誓願」50-1)

こうしてラビ・アキバは当時の最も偉大なラビの一人となった。一度は娘を勘当したカルバ・サブアもそれを知って勘当を解き、財産の半分をラビ・アキバに譲った。ラビ・アキバは、昔約束したとおりの妻ラケルに「黄金のエルサレム」をプレゼントするのである。ミシュナーやエルサレム・タルムードには彼が「黄金の町<sup>11)</sup>」(בְּרַחֲבֵי שֵׁטַל זָהָב [‘ir šel zāhāb]) という名の装身具を贈ったことを伝える記事が残されている。

彼の妻は「カルドゥティン」と「黄金の町」を身につけて町に出た。彼の弟子たちは言った。「ラビ、あなたが彼女におこなった事によって、あなたはわたしたちを辱めました。」彼は彼らに言った。「彼女はトラーラーのために多くの苦しみを私と共に味わったのだ。」

(ミシュナー「ネズイキン」アボット・デラビ・ナタン 6章)

ラビ・アキバは彼の妻に「黄金の町」を作った。ラバン・ガムリエルの妻がそれを羨んだ。彼女は夫のところに行き、そう告げた。夫は彼女に言った「あなたは、彼女が夫にしたと同様のことを、私にしたのかね。彼女は夫がトラーラーを学ぶために、自分の髪の毛まで売ったのだよ。」

(エルサレム・タルムード「安息日」6章)

以上二つの物語では、ラビ・アキバがラケルに「黄金のエルサレム」を贈ったことで、弟子たちや同世代のラビ、ラバン・ガムリエルの妻らにちょっとした騒ぎが起こった事を物語っているのであるが、それ以上に「髪の毛まで売った」という、ラケルが夫のために行った具体的行動の内容が残されていて興味深い。このラビ・アキバと妻ラケルの物語は、イスラエル（もしくはユダヤ人コミュニティ）で育った者であれば、おそらく誰もが本や教科書など何らかの形で学んでいる有名な物語である。イスラエル人が「黄金のエルサレム」という名称を聞いたときに連想するのは、ラビ・アキバが妻ラケルに贈った「黄金の冠」と、そ

---

11) ここで引用されるミシュナーやエルサレム・タルムードではラビ・アキバが妻ラケルに贈った装身具は「黄金のエルサレム」という名称ではなく、「黄金の町」という名前前で登場する。これらの名称が同じ装身具を指していることは、次のタルムードの箇所が証明している。「女性には安息日に『黄金の町』を付けて外出してはならない。『黄金の町』とは何か。『黄金のエルサレム』である。」(バビロニア・タルムード「安息日」59-1)

れにまつわるラビ・アキバとラケルの愛と献身の物語なのである。

紀元152年ローマの皇帝ハドリアヌスの時代、ローマによる「割礼禁止」などの反ユダヤ的政策がきっかけとなり、バル・コクバを指導者とするユダヤ人蜂起が起きる。ラビ・アキバはバル・コクバをメシア（救い主）とまで宣言してこの反乱に積極的に参加し、彼の弟子たちのほとんどもバル・コクバの兵士として命を失ったと考えられている。バル・コクバの反乱後、ローマはユダヤ人が一切の宗教教育を行う事を禁止したが、ラビ・アキバはローマの命令に反して聖書や律法を教え、残酷に処刑されるのである。

さらにラビ・アキバについて深く学ぶ者は、彼がエルサレム崩壊と民族の離散という最も悲惨な時代にイスラエルの指導者として生きながら、最後までエルサレムの再建を信じて行動し続けたことを語る多くの物語に出会うであろう。ラビ・アキバの物語とその時代を学ぶ事により、エルサレム神殿の破壊による流浪の始まりと第三次中東戦争におけるエルサレムへの帰還が、ユダヤ人の中でどのように約二千年の時を超えて結び合わされるかを多少とも感じることができるであろう。またそれによってナオミ・シェメルが彼の物語をエルサレムの歌の題名に取り上げた理由－エルサレム帰還への祈り－がより深く理解できるであろう。「黄金のエルサレム」を歌うときにユダヤ人が抱く感情を知り、この曲の持つ不滅の人気を探るためには、ラビ・アキバの接点は大切なポイントの一つである。

### 3) 「黄金のエルサレム」に引用される聖書の言葉

次に「黄金のエルサレム」内に引用されている聖書の言葉を見ていきたい。最初に登場するのは「哀歌」である。「哀歌」は、紀元前586年エルサレムの神殿がバビロニア軍によって破壊されて後、かねてからエルサレム崩壊の預言をしていた預言者エレミヤがその崩壊を嘆いて歌ったとされる歌である。「哀歌」の書き出しは次のようになっている。

#### 【哀歌 1 章 1 節】

אֵיכָה | יָשְׁבָה בְּדָד הָעִיר רַבָּתִי עָם  
'ām rabātī hā'ir bādād yāsōbā 'ēkā

「何ゆえ独りで座っているのか 人に溢れていたこの都が」

この哀歌 1 章 1 節が「黄金のエルサレム」では 1 番の最後

יֹשֶׁבֶת בְּדָד אֲשֶׁר הָעִיר (独りで座している町)  
yōšebet bādād 'āšer hā'ir

と、2 番の最初

הַמַּיִם- בֹּרֹת יָבֹשׁוּ אֵיכָה (どうして貯水槽は枯れてしまったのか)

hammayim bōrōt yābōšū 'ēkā

に分けて使われている。この二つの箇所が、「黄金のエルサレム」の1番の歌詞全体の中では強いインパクトをもってナオミ・シェメルが表現しようとする内容を代弁する。ではこの「哀歌」からの引用は曲全体の中でどのような効果をもたらしているか、順を追って見てみたい。

1番の歌詞では、最初にエルサレムの夕暮れの様子が描写されている。

山々の空気はワインのように透明で 松の香りが 鐘の音とともに たそがれの風に漂う

ここまでは一見美しく描かれた町の夕暮れである。「ワインのように透明」で味覚と視覚に訴え、「松の香」で嗅覚に、「鐘の音」で聴覚に訴えて、人間のもつ五感全体で町の様子を表現しているように思われる。しかし1番の歌詞に、人間の五感のうち「触覚」だけは歌われていない。その理由が次の歌詞で明らかになる。

木と石がまどろむ時 彼女は夢に囚われる ただ一人で座している街

夕暮れになって町がまどろむのであるが、美しい町の描写をしつつここに初めてシェメルは"שְׁבוּיָהּ" [šəbūyā] (囚われている) という言葉を使って、その町が自分の近くにはなく遠くから眺め見ることだけしか許されないという、触れることのできない悲しみを表現している。しかしここではまだ「夢」という言葉との連結によって、その悲しみは緩衝地帯を設けて表現されている。また"שְׁבוּיָהּ" という言葉は、確かにユダヤ人がエルサレムから切り離されているという「捕囚」をイメージさせる言葉ではあるが、しかしこの一言では聖書の特定の箇所をイメージすることはできない。

シェメルがさらに強く自分の気持ちを表現する時には、ヘブライ語の一言を読んだだけではっきりとある特定の古典の物語が連想され、イメージされる言葉を使う。それによって一つの言葉がもつ力が限りなく増幅されるのである。そのような力を込められた詞が、1番においては哀歌から引用された「ただ一人で座している町」なのである。ユダヤ人がこの言葉からイメージする描写をよりはっきりと掴むためには、聖書の「哀歌」全体を、または「列王記」や「エレミヤ書」を読まねばならないが、ここでは「哀歌」の1章1節のみを参考のために引用しておく。

なにゆえ、独りで座っているのか 人に溢れていたこの都が。  
やもめとなってしまったのか 多くの民の女王であったこの都が。  
奴隷となってしまったのか 国々の姫君であったこの都が。

(哀歌 1 章 1 節 新共同訳)

日本語で「独りで座している」と聞いただけでは、その言葉の持つ響きはさほど強烈ではない。しかし、その言葉の原典が意図する背景にある内容を含めて読むと、「女王」が「やもめ」に変化してしまい、「姫君」が「奴隷」に変化してしまったという悲痛な叫びが聞こえてくる。1 番の前半に描写される美しい夕暮れの描写が、この一言で会うことの許されない囚われの恋人への、強烈な思慕の情と悲痛な叫びへと変わってしまうのである。ちなみに 1 番の最後、

その心には 城壁がある

という歌詞は、町の中心に壁が走り、イスラエル側とヨルダン側とに分けられていた当時のエルサレムの状態を言い表している。そしてユダヤ教の最も大切な聖地「西の壁」と「神殿の丘」はヨルダン側にあって、ユダヤ人は近づくことが許されていなかったのである。

「哀歌」が引用されているもう一つの箇所は、2 番の最初である。2 番は「哀歌」の最初の言葉と同様 "אֵכָה" ['ēkā] (「なぜ！」という嘆きの叫び) で始まる。

なぜ貯水槽は枯れてしまったのか 市場の広場は空虚である。

旧市街で 神殿の丘を見守る者はいない

岩山の洞穴には 風が吼えたける

誰もエリコの道を通して 塩の海に下りて行く者はない

この "אֵכָה" ['ēkā] という言葉は、「哀歌」というエルサレムの崩壊と廃墟がテーマとなっている書のヘブライ語名称そのものでもあり、2 番の内容が「廃墟なるエルサレム」であることはこの一言を聞いただけで強く予感される。実際に 2 番で歌われるのは、荒れ果てて人のいなくなったエルサレムの姿である。さらにシェメルは「哀歌」の出だし部分との関連付けを言葉の音の響きにも求めている。「哀歌」の最初の二単語は "אֵכָה יָשְׁבָה" ['ēkā yāšəḇa] (なぜ座っているのか) であるが、シェメルは "אֵכָה יָבֹשׁוּ" ['ēkā yābəšū] (なぜ乾いてしまったのか) と語根<sup>12)</sup>の文字が一箇所入れ替わっているだけの動詞を使って、音の響きが似通った

出だしを作り出した。

### 【イザヤ書 6 章】

次に登場する聖書の箇所は、イザヤ書の 6 章 6～7 節である。ここでは紀元前 8 世紀に活躍した預言者イザヤ<sup>13)</sup>が、神から預言者として選ばれる物語が語られている。この物語で大切な役割を演じているのは、"סְרָפִים" [śərápim] という天使である。"רֶשׁ" [śin, rēs, pē] という語根は「焼く」という意味を持つが、その名の通りセラフィムは罪を焼き尽くす天使である。セラフィムが持つ「火」が唇に触れたイザヤは、その罪が燃え尽くされ預言者として相応しい人間となるのである。イザヤ書の原文を引用する。

するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。彼はわたしの口に火に触れさせて言った。「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」

(イザヤ書 6 章 6 - 7 節 新共同訳)

この「セラフィム」という天使が「黄金のエルサレム」3 番の歌詞に登場する。まず 3 番の歌詞を最初から読んでみよう。

しかし今日私は来て 汝を讃えよう そして汝に冠をかぶせよう  
汝の息子たちの誰よりも そして最後の詩人よりも私は小さい

2 番の「廃墟なるエルサレム」の歌詞から、3 番では打って変わって「あなたを讃えよう」とエルサレムへの賛美へと変わる。「はじめに」の項目で紹介した、決して失望や悲しみで曲を終えず、希望を歌いこむナオミ・シエメル<sup>12)</sup>の刻印がここからスタートするのである。まず「汝に冠をかぶせよう」という言葉は、3 番の最後に登場する「黄金」という言葉とあいまって、ラビ・アキバがその妻ラケルに贈った金の冠「黄金のエルサレム」を連想させる。

---

12) 「語根」とは、ヘブライ語の単語の語源となる三、ないし四文字で構成される文字グループのこと。今回の例の場合、「哀歌」に登場する「座る」の語根は"שָׁב" [yūd śin bêt], 「黄金のエルサレム」で使われる「乾く」の語根は"יָבֵשׁ" [yūd, bêt, śin] である。

13) 預言者イザヤは紀元前 8 世紀にエルサレムで活躍したが、イザヤ書全体は一人の預言者のよる預言ではなく、バビロニア捕囚時代までにわたる数名の預言者による預言の集大成であると考えられている。

ラビ・アキバのモチーフが、悲しみの2番から、賛美の3番への転換点に大切な役割を演じている。そしてさらに、この転換点で最も大切な役割を演じるのがイザヤ書に登場する「セラフィム」である。

汝の名は、唇をこがす  
まるでセラフィム<sup>14)</sup>の接吻のように  
エルサレムよ、もし私が汝を忘れるならば  
その全てが黄金の

2番から3番（そしてさらには「くりかえし部分」において完成するのであるが）にかけてシェメルが通過しなければならない転換とは何であろうか。2番では「哀歌」を引用しつつ「廃墟であるエルサレム」を歌っている。ナオミ・シェメルが多くの作品で見せている手法に従うのであれば、彼女はこのあと曲を悲しみのまま終わらせるのではなく「エルサレムへの帰還と復興への希望」を歌わねばならないのである。

イザヤ書はイスラエル民族のエルサレム帰還とエルサレムの復興をもっとも多く綴った預言書であるが、その預言者が誕生するきっかけとなった体験がセラフィムとの出会いであった。ナオミ・シェメルはこの預言者の召命体験を、あたかも自分の体験かのように引用することにより「エルサレムへの帰還と復興への希望を歌いたい」という意志を強く表現した。こうしてエルサレムへの帰還を歌うための心準備は完了するのである。

それではシェメルは「エルサレムへの帰還と復興」を一体どこに、どのように歌っているのでしょうか？ それにはもう少し歌詞を読み進める必要があるが、そこに到達する前に同じ3番に引用されている、もう一つの聖書の箇所を読んでみたい。

#### 【詩篇137篇】

3番の後半「もし私が汝を忘れるならば」という部分に引用されているのは、詩篇137篇である。紀元前586年、ユダ王国を滅ぼしたバビロニアはユダヤの民の多くをバビロニアに引き連れて行くが、この詩はその時代のユダヤ人がエルサレムを慕って歌った詩である。1節～5節を引用する。

---

14) イザヤ書ではこの天使の名は "סְרָפִיִּים" [śārāpim] という複数形が使われているのに対し、「黄金のエルサレム」では "סְרָפִי" [śārāp] という単数形が使われている。これは最後の行の "זָהָב" [zā hāb] (黄金) と韻を踏ませる必要からであるが、日本語訳では固有名詞として扱い「セラフィム」と聖書での名称と同様に複数形でカタカナ表記した。

バビロンの流れのほとりに座り シオンを思って、わたしたちは泣いた。  
豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。  
わたしたちを捕囚にした民が 歌を歌えと言うから  
わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして 「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。  
どうして歌うことができようか 主のための歌を、異教の地で。  
エルサレムよ もしも、私があなを忘れるなら  
私の右手はなえるがよい。

(詩篇137篇 1節～5節 新共同訳)

この詩篇では「異国にあってエルサレムの歌など歌えない」と、エルサレムで主を賛美する時に使われる豎琴は封印されてしまう。この豎琴は、「黄金のエルサレム」では「くりかえし」の部分に登場してこの歌の中で重要な役割を果たすのであるが、それについては後述する。3番の歌詞に直接引用される部分は、「エルサレムよ、もしも私があなを忘れるなら」(5節)という箇所である。詩篇ではそのあとに「私の右手はなえるがよい」と続くのであるが、シェメルはその代わりに「その全てが黄金である」という言葉を入れ、聖書原文にシェメル独自の色づけをする。ここにも、「哀歌」の引用で見たような、聖書の言葉に少しだけアレンジを加えて引用するというシェメル独特の手法が見られる。この手法が持つ効果はそのつどさまざまであるが、この例では曲全体のテーマである「黄金」を3番の最後に加えることにより、最初の「冠」と色彩感が統一され、また「ラビ・アキバ」のモチーフが3番全体に統一感を与えている。

#### 4) 「黄金のエルサレム」に引用されるユダ・ハレヴィの詩

「黄金のエルサレム」のクライマックスでもある「くりかえし部分」には中世の詩人、ユダ・ハレヴィの詩が引用されている。ユダ・ハレヴィは12世紀、スペインを中心に活躍した思想家であり詩人で、ユダヤ教におけるエルサレムの重要性を強調し、エルサレムを慕う歌を多く詠んだことで有名である。エルサレムを慕った詩人らしく彼は遠くエルサレムへ向かう旅に出るが、旅の途中エジプトで生涯の最後を迎えたと考えられている。「黄金のエルサレム」にユダ・ハレヴィが登場することで、この曲には聖書時代、ラビ文学時代、そして中世と、各時代の文学を代表する、エルサレムをテーマとする作品が網羅されて引用されていることになる。

ユダ・ハレヴィが詠んだ数多くのエルサレムの歌の中でも、最も有名な詩が、「黄金のエルサレム」に引用されている "שִׁיּוֹן הָלֹל תִּשְׁאָלֵי" [šiyōn hālō tiš'ālī] (エルサレムよ、尋ねはし

ないのか) で始まる詩である。原詩は34行からなるが、ここではナオミ・シエメルの曲に直接関係のある1行目と4行目のみを紹介する。

אַסִּירַיִק	לִשְׁלֹם	תִּישׁ אֲלֵי	הַלֵּל	צִיּוֹן
'āsīrāyik	lišlōm	tis'ālī	hālō	šiyyōn
אַדְרַיִק	יָתֵר	וְהֵם	שְׁלוֹמֶךָ	דֹרְשֵׁי
(1行目)	'ādarāyik	yeter	wəhēm	šəlōmēk dōrəšē

אֶחְלֹם	וְעַתָּה	תַּנִּימ	אֲנִי	אֶנְיֹתֶךָ	לִבְכוֹת
'ehēlōm	wə'ēt	tannim	'anī	'enūtek	libkōt
	אֶשְׁרִיִּף	כְּנֹר	אֲנִי	שְׁבוּתֶךָ	שִׁבַּת
(4行目)	ləšīrayik	kinnōr	'anī	šəbūtek	šibat

シオンよ、あなたは、あなたの囚われ人の安否を尋ねはしないのか  
あなたの平安を求める者たちは、あなたの群れの生き残り

あなたの苦しみを嘆くのに、私はジャッカルである  
私があなたの囚われ人らの帰還を夢見る時、私はあなたの歌に豎琴となる

「シオンよ、あなたは尋ねはしないのか」という詩の書き出しは良く知られており、現代においても宗教音楽作家シュロモー・カルリバッハが書いたメロディーにあわせてよく歌われる。ここで紹介した2行のうち、シエメルが使っているのは1行目の"הַלֵּל" [hālō] (～ではないのか) と、4行目の"אֶשְׁרִיִּף כְּנֹר אֲנִי" ['anī kinnōr ləšīrāyik] 「私はあなたの歌に豎琴となる」という部分である。

ユダ・ハレヴィの原文では1行目はシオンに対する訴えである。「あなたの囚われ人」とはディアスポラにいるユダヤ人を指す言葉であるが、あたかも遠く離れて会う事のできない恋人に語りかけているようにシオンに語りかける。そして4行目では詩篇137篇にも登場した「豎琴」が使われている。ユダ・ハレヴィが意図するところは、かつてバビロニアの捕囚時代にはシオンを賛美するための豎琴は封印されてしまった。しかし「あなたの囚われ人」つまりディアスポラにあるユダヤ人たちがシオンに帰還する日が来る時、私は自分自身が豎琴になってシオンを賛美する、ということである。ただしこの歌が歌われた時点ではまだ「あなたの苦しみを嘆くのに、私はジャッカルである」という状態なのである。

それではナオミ・シエメルはこれらの言葉をどのように使っているのでしょうか。シエメ

ルは1行目で使われている"חָלוֹ" [hālō] (～ではないのか)と、4行目で使われている"אָני קִינּוֹר לְאֵי שִׁירְיֶיךָ" [ʾāni kinnōr ləšīrayik] (私はあなたの歌に豎琴である)を繋ぎ合わせて"חָלוֹ לְכֹל שִׁירְיֶיךָ אָני קִינּוֹר" [hālō ləkol šīrayik ʾāni kinnōr] (私はあなたの全ての歌に、豎琴ではありませんか)という全く新しい文を生み出した。

この新しく生み出された文章の持つ効果は絶大である。まずシェメルはもともと苦境の訴えを強調するために使われた言葉"חָלוֹ" [hālō] (～ではないのか)という言葉で「私はシオンを賛美する豎琴ではありませんか」という喜びを強調する言葉に転換してしまった。「全ての」を意味する"לְכֹל" [ləkol] はシェメルの挿入。)またユダ・ハレヴィは「シオンへの帰還を夢見る時に私は豎琴になる」と未来への希望を語ったが、シェメルはこのアレンジにより「私は豎琴ではありませんか」という、強い現在形で語る文章に変えてしまった。もともと愛するものに会えない悲しみを歌ったユダ・ハレヴィの詞を、少しアレンジして希望が成就した喜びの歌詞に作り変えてしまうところに「言葉の魔術師」と称されるシェメルの本領が発揮されている。これはまぎれもなくユダ・ハレヴィの夢の現実化を意図するアレンジであり、ひいては預言者イザヤが何度も語る「エルサレム回復とユダヤ人の帰還」の預言の完成の意味もそこには込められている。またここに詩篇137篇に始まる「封印された豎琴」のモチーフも、封印を解く日を夢見たユダ・ハレヴィを通過してついにシェメルでその完成を見るのである。

第三次中東戦争後に作られた4番を待つまでもなく、このくりかえし部分にはすでに「民族の理想を歌う」という、シェメルの刻印がはっきりと刻まれている。

## 5) まとめ — 第三次中東戦争と「黄金のエルサレム」

ナオミ・シェメルが「黄金のエルサレム」を書いたときは、エルサレムの町はまだ分断されており、ユダヤ人は聖地に足を踏み入れることはできなかった。その意味ではまだディアスポラは継続していたのである。そのディアスポラの悲しみは1番、2番の歌詞に歌いこまれた。しかし3番で大きな転換点を通り、シェメルはくりかえしの部分にユダ・ハレヴィの言葉をアレンジして「成就したエルサレムへの帰還と復興」を歌い、この曲全体を通じての完成の意味を込めた。

そしてこの曲が発表されてからわずか三週間後に第三次中東戦争が起き、エルサレム旧市街がイスラエルの主権下に入るという歴史的事件が起きたという事は前に書いた。これが「黄金のエルサレム」にとって運命的なタイミングであったことはまちがいない。エルサレムの数千年にわたる歴史を追体験させ、さらに帰還の喜びまでを歌うという歌詞の内容が、この歴史的タイミングとあいまって「黄金のエルサレム」は「イスラエル第二の国歌」という冠

を戴き、現在も不滅の印象を与え続けているのである。

(第三次中東戦争後「新しい歌詞が欲しい」という兵士たちの要請に応じてシエメルは4番の歌詞を付け加えた。4番は、2番の「エルサレムの廃墟」の内容を全て逆転させて、「エルサレムへの帰還」を歌った内容になっているが、そこにははっきりと特定できる形での古典の引用はなく、本稿では扱わない。おそらく文学的価値よりも歴史の証人としての価値のほうが高い部分であろう。)

## 参考文献

- 池田潤 [1999] 『ヘブライ語のすすめ』, ミルトス  
手島勲矢 (編) [2002] 『わかるユダヤ学』, 日本実業出版社  
共同訳聖書実行委員会 [1992] 『新共同訳聖書』, 日本聖書協会  
ロバート・セント・ジョン (島野信宏訳) [1988] 『不屈のユダヤ魂』, ミルトス  
Ben-Sasson, H.H. [1977], "History of the Jewish People" vol.3, Harvard University Press  
Bialik, Ch.N.;Ravnitzky, Y.Ch. [1986] "Sefer Haagada", Dvir Publishers Ltd.  
Brown,F.;Driver,S.R.;Briggs,C.A. [1951] "Hebrew and English Lexicon of the Old Testament", Clarendon Press  
Shaked, Gershon [1977] "Hebrew Narrative Fiction1880-1980", Hakibbutz Hameuchad and Keter  
Stinger, S. [1978], "History of the Jewish People" vol.5,6, Harvard University Press  
Waxman, M. [1938] "A History of Jewish Literature", Bloch Publishing co.  
Old Testament "Biblia Hebraica" [1984], Deutsche Bibelgesellschaft  
הרמן, מרקין (עורך) [1997], "תלמוד בבלי מסכת נדרים" המכון הישראלי לפרסומים תלמודיים  
(Markin, Hermann [1997], "The Babylonian Talmud masechet Shabbat", Israel Institute for Talmudic Publications)  
ירדן, דוב [1986], "שירי הקדש לרבי יהודה הלוי" קרית נוער  
(Jarden,Dov [1986], "The Liturgical Poetry of Rabbi Yehuda Halevi", Boys Town)  
לוינסקי, יום-טוב [1975], "איציקלופדיה של הווי ומסורת ביהדות" דביר  
(Lewinsky, Yom-Tov (1975), "Encyclopedia of Folklore, Customs, and Tradishon in Judaism")  
מרגליות, מורדכי [1987], "אנציקלופדיה לחכמי התלמוד והגאונים" יבנה  
(Margalioth, M. [1987], "Encyclopedia of Talmudic and Geonic Literature", Yavneh)  
שמר, נעמי [2003], "סימני דרך", כנרת, שומר, נעמי [2003], "Road Sings", Kinneret)  
קובן, רוני "על כל אלה", [2004], *להיפריד בשיח*, מעריב  
(Kuben, Roni [2004], *lehiparéd beshir*, Maariv)  
אוניברסיטת בר-אילן [2001], "תלמוד ירושלמי מסכת שבת" (פרוייקט הש"ת גירסה 9), אוניברסיטת בר-אילן  
(Bar Ilan University [2001], "The Jerusalem Talmud Masechet Shabbat", The Respsna Project version 9 (CD-ROM), Bar Ilan University)  
<http://e.walla.co.il/?w=/1000/562299&tb=/i/2869300> 2004/6/27  
<http://glz.msn.co.il/glz/culture/7B96FD22FBC94F59849E6A7C3F0719E3.htm> 2004/7/2